オンラインによる異文化交流が看護学生に及ぼす影響

The Impact of Online Cross-Cultural Interaction on Nursing Students

○丸山加菜[1]，桑野紀子[1]，小野七菜恵[2]，野村弥生[3]
Kana Maruyama, Kuwano Noriko, Nanae Ono, Yayoi Nomura
1　大分県立看護科学大学，2　福岡赤十字病院，3　小倉記念病院
Oita University of Nursing and Health Sciences, Japanese Red Cross Fukuoka Hospital, Kokura Kinen Hospital

【背景と目的】

在留外国人数の増加に伴い、医療現場でも外国人と関わる機会が増加している。看護師として文化社会的背景が多様な対象に十分な看護を提供するためには、異文化への対応力を向上させることが有効であるとされ、学部教育に異文化交流の機会を組み込む看護系大学が増加している。しかし、COVID-19 感染拡大以降、対面での異文化交流の場は激減した。一方で、オンラインの活用が急速に普及し、異文化交流にも利用され始めているが、その効果は明らかになっていない。そこで本研究では、オンライン上での異文化交流により看護学生にどのような影響がもたらされたのか明らかにすることを目的とする。

【方法】

A 看護系単科大学で 2021 年 8 月に実施されたオンライン国際交流に参加した学生 16 名に対し、無記名自記式質問紙調査および半構造化面接調査を実施した。対象者は、質問紙の回答が得られた 12 名および、インタビューの同意が得られた 9 名で、調査期間は、2021 年 7 月中旬から 8 月末日であった。質問紙調査では、交流前後各 2 週間以内に調査を実施し、交流前は、「属性」2 項目（性別・学年）「オンライン国際交流前の異文化交流経験と学習に関する事項」11 項目、Intercultural Sensitivity Scale（ISS）（Chen & Starosta, 2000）24 項目について、交流後は「今回のオンライン国際交流の経験について」8 項目、ISS 24 項目について尋ねた。属性及び ISS を除く項目は基本統計処理を行い、ISS は全 24 項目及び 5 つのサブカテゴリー毎に集計し、合計点、平均値、標準偏差値を算出し、Wilcoxon の順位和検定を行い、交流前後で比較した。また、各対象者の交流前後の ISS 得点の変化をみた。インタビュー調査では、交流後に変化した学生の異文化や看護に対する考え・気持ち、交流に参加して良かったことについて尋ねた。インタビュー内容は同意を得て録音し、逐語録を作成した。オンライン交流により変化した学生の考えや気持ちに焦点を当て、質的帰納的に分析を行った。本研究は、大分県立看護科学大学研究倫理安全委員会の承認を得て実施した。（承認番号：21-23, 24）交流の概要は、A 看護系単科大学と MoU を締結した韓国の大学の学部生各 16 名計 32 名が参加した。全体で自己紹介、大学・地域紹介のプレゼン後、日韓の学生 2 名ずつブレイクアウトルームに分かれて交流する 2 部構成であった。

【結果】

質問紙調査では、ISS の交流前後比較した結果、合計の平均点が交流前 90.67±7.75 点、交流後 91.25±11.33 点であり、合計及び 3 カテゴリーで僅かに平均値が上昇したが、有意な差はなかった。対象者ごとの前後比較では、交流後に得点が上昇した人数が多いカテゴリーは「Interaction Engagement」と「Interaction Confidence」であった。インタビュー調査では、分析した結果、7 個のカテゴリーが抽出された。カテゴリーは、【学習に関する気づきと意欲向上】、【活動の幅の拡大への端緒】、【ポジティブな心理的変化】、【自己の内面的な成長と気づき】、【文化や制度に関する気づきと関心の高まり】、【看護学生としての意識の変化】、【オンライン交流の良さ】であった。

表 1.　オンライン国際交流前後の ISS の変化

Category Items	Pre M±SD	Post M±SD	P値
Total	90.67±7.75	91.25±11.33	0.875
1.Interaction Engagement	29.17±2.98	29.25±2.77	0.891
2.Respect for Cultural Differences	26.83±2.25	26.42±3.15	0.588
3.Interaction Confidence	13.92±3.03	14.92±4.60	0.234
4.Interaction Enjoyment	11.08±1.97	10.92±2.61	0.810
5.Interaction Attentiveness	9.67±1.97	9.75±2.01	0.714

【考察】

ISS について、本研究の対象者は交流前から先行研究の日本人看護学生の平均値 78.5 点（Kuwano & Kameya, 2021）よりも高く、交流後に顕著な変化は見られなかった。今回の対象者は自ら交流に参加希望し、もともと異文化感受性が高かったことが推察された。インタビュー調査では、対象者は、交流によって不安な気持ちが楽しさや嬉しさへ大きく変化し、【ポジティブな心理的変化】が生じていた。ISS の「Interaction Confidence」が上昇している対象者が半数を占め、対面交流に比べ非言語的コミュニケーションによる情報が少ないオンラインでも、交流により自信を失うことなく達成感が得られ、チャレンジ精神の出現や学習意欲の向上といった効果があることが示唆された。異文化理解や看護観の深まりについては、気づきの段階にとどまり、語学力の向上は殆ど見られなかった。今回、初めてのオンライン国際交流の試みであったが、今後、プログラム内容を設定する際は、学生の交流経験の有無やレディネスを考慮しつつ、段階的にねらいを設定し、交流内容を検討していく必要があると考える。

本研究における開示すべき利益相反（COI）はない。
本研究は JSPS 科研費（21K10580）の助成を受けて実施した。

【引用文献】

Chen, G., & Starosta, W. J. (2000). The Development and Validation of the Intercultural Sensitivity Scale. Human Communication, 3(1), 3-14.
Kuwano, N. & Kameya., M. (2021). Comparative Study on the Intercultural Sensitivity of Japanese and Korean Nursing Students